

「まちを見る感性」が地域愛着及び主観的幸福感に与える影響

主観的幸福感向上のためのまち歩き手法開発に向けた基礎的研究

Influence of "sensitivity to see the town" on regional attachment and subjective well-being

Fundamental Research for the Development of a Town Walking Method to Improve subjective well-being

安倍 ひより*・蘆谷 祐介**
Hiyori Abe*, Yusuke Yabutani**

In this study, we hypothesized that differences in how people perceive a town during a walk affect place attachment and subjective well-being. We defined this perceptual difference as "sensitivity to see the town" and empirically examined its impact on place attachment and subjective well-being. A survey of university students revealed that "sensitivity to see the town" influences subjective well-being through place attachment and that a relationship exists between them. Additionally, it was found that focusing on key objects enhances place attachment by promoting the assignment of meaning, with learning and awareness (imagination) playing a role in this process.

Keywords: place attachment, subjective well-being, walking around town, landscape, Toyama City, how to see the town

地域愛着, 主観的幸福感, まち歩き, 景観, 富山市, まちの見方

1. はじめ

1-1. 研究の背景

国の経済規模を表す国内総生産 (GDP) といった客観的指標により規定される幸福度は、必ずしも人々の幸せに関係しないことが指摘されており¹⁾、近年、主観的幸福感 (Subjective well-being) が着目されている。主観的幸福感とは、暮らしに対する個人の満足度を反映する概念²⁾や、生活全体の質に対する個人の主観的な評価³⁾と説明される。主観的幸福感とは、これまでに様々な要因との関係性が明らかになっている^{4) 5)}。その1つとして、地域愛着との関係が指摘されており^{6) 7)}、地域愛着を醸成することにより、主観的幸福感が向上すると考えられる。

それでは、地域愛着の醸成にはどのような方法が有効であろうか。近年、地域愛着の醸成に向けた取り組みとして、まち歩きが注目されている^{8) 9)}。海野¹⁰⁾は、まち歩きが地域愛着の醸成において有効であることを明らかにしている。また、小林ら⁹⁾や豊田ら¹¹⁾は、まち歩きが地域への理解促進に効果があることを明らかにしている。加えて、佐野¹²⁾は、地域への理解度が高いほど、地域愛着も高いことを明らかにしている。すなわち、まち歩きが地域への理解を促進し、それにより地域愛着が醸成されると考えられる。

しかし、まち歩きでは、歩く際に何を見て見たものをどのように解釈するかといった、まちの見方が重要であると考えられる。これまでに、決められたルートで説明を受けながら歩くまち歩きと、まちを自由に散策し自分たちでまちを理解していくまち歩きを比較すると、後者の方が地域に対する愛着が高まることが明らかにされている¹³⁾。前者は受動的に知識を得るまちの見方であるのに対し、後者は能動的に発見や気づきを得るまちの見方である。すなわち、まちの見方の違いによって、地域愛着にもたらされる影響に差異が見られると推察される。

1-2. 「まちを見る感性」の定義

まちの見方の構造を捉えるにあたり、現象学的な景観概念に基づいた景観解釈の構造を参照する。景観の捉え方は時代とともに主な着眼点に変化している。従来は、デカルトの物心二元論を受けた操作的景観論¹⁴⁾をはじめとして、景観と人の間に「主体-客体」が存在し、景観を客観的な対象として捉える景観論が展開されてきた。しかし、近年は、そのような景観論が見直されている。主観を出発点とし、現象学的な捉え方に主眼が置かれるようになり、人と環境の関係性が問われるようになった。阿部¹⁵⁾は、「景観は、つねに何らかの意味として与えられる」と述べており、人が景観に対して見出す意味がいかなるものであるかが一つの着眼点となっている。

これまでに現象学的景観論に基づいた景観解釈の構造を実証的に明らかにした研究として、松村ら^{16) 17)}のものがある。これらの研究では、景観に対して主体にとっての意味がどのように立ち現れるのかに着目し、景観解釈の構造について以下の通り明らかにしている。

景観解釈は、景観を構成する要素 (以下、視対象) を見る段階と、見た視対象に対して意味付けをする段階 (以下、意味付与) といったプロセスから成立し、また、意味付与では、視対象に関連のある自己の中に蓄積されている「知」が作用している。具体的には、景観解釈は人間が景観の中で視対象として着目したものに対して、それに紐づく自身の経験や見聞きしたことなど、自身の中に蓄積されている「知」を引き出して意味を与えるというプロセスから成立する。「知」とは知識のことを示しており、一般的な知識の定義は正当性が求められることが多いが、この研究では事実として客観的に存在する知識に限らずより広義に捉えられている。意味付与は、意味付与 (表象評価) と意味付与 (学び・気づき) の大きく2つの側面で構成されている。意味付与 (表象評価) とは、視対象に対する直感的な評価

* 学生会員 富山大学人文社会芸術総合研究科 (University of Toyama)

** 正会員 富山大学学術研究部芸術文化学系 (University of Toyama)

であり、視対象に対して面白い、楽しい、居心地が良いなどの印象を抱くことがこれにあたる。意味付与（学び・気付き）とは、主体の思考を働かせ、新たな気づきや学びを獲得する意味付けを行うことがこれにあたる。視対象に対して、意味付与（表象評価）が生じ、意味付与（学び・気付き）が醸成されるという流れが確認されている。

本研究では、松村ら¹⁶⁾¹⁷⁾の既往研究で明らかになった景観解釈の構造に基づき、まちの見方を捉える。まちの見方は、それぞれがまちで何を見るか（視対象の選択）、そして、見たものに対して何を感じるか（意味付与（表象評価））、更に、どういった気付きや学びを得るか（意味付与（学び・気付き））によって異なると考えられる。本研究では、このようなまちの見方に影響を与える働き、すなわち、まちで何を見るかと、見たものに対して感じる心の働きや意味を見出す能力を「まちを見る感性」と定義する。つまり、「まちを見る感性」は視対象の選択と、意味付与という景観解釈のプロセスから構成される能力であるため、景観解釈のプロセスの違いから、「まちを見る感性」の違いを把握することができると考えられる。

1-3. 研究の目的

これまで、まち歩きにおいてはまちの見方が異なることで、地域愛着や主観的幸福感に与える影響が異なること、さらに、「まちを見る感性」の働き方の違いによりまちの見方が異なることを述べてきた。これらのことから、「まちを見る感性」の違いによって地域愛着及び主観的幸福感への影響が異なると仮説を立てることができる。この仮説に基づき、本研究では、どのような「まちを見る感性」の働き方が地域愛着及び主観的幸福感の向上に繋がるかを明らかにする。これにより、地域愛着や主観的幸福感の醸成に向けたまち歩きの方法論を検討する際の有用な知見を得られると考えられる。なお、本研究におけるまち歩きは、ルート設定の有無などある特定の条件を想定したもののみではなく、あらゆるタイプのものを含んでいる。一方、本研究の調査では、同様の条件のもと、視対象の選択にどのような違いがあり、それが地域愛着と主観的幸福感にどのように影響するかを把握するためにルートを指定して実施した。しかし、今回の調査では、視対象の選択と地域愛着、主観的幸福感の関係を明らかにすることを目的としており、それらの関係はルート設定の有無に関わらず、あらゆるまち歩きに適応できる知見であると考えられる。

1-4. 研究の位置付け

主観的幸福感に関する研究は、心理学や公衆衛生学を中心に蓄積されており、近年は都市計画分野でも見られるようになった。北川ら¹⁸⁾は、移動時の風景に対する好意度が主観的幸福感に影響を与える可能性を示唆している。また、橋本ら¹⁹⁾は、サードプレイスの有無やサードプレイスへの訪れ方が主観的幸福感に影響することを明らかにしている。更に、長ら²⁰⁾は、高齢者の自治会活動への参加と主観的幸福感に関係があることを明らかにしている。このように、主観的幸福感は、日常的に目にするもの、まちの中の居場所、地域活動参加と関連があることが明らかにされて

おり、まちとの関わり方の違いによって差異が見られることが示唆されている。

地域愛着に関する研究として、大谷ら²¹⁾は、高齢者の交通手段と地域愛着の関係性に着目し、徒歩を用いる人は、自家用車、バス、地下鉄を利用する人と比べ、地域愛着が高いことを明らかにしている。藪谷ら²²⁾は、通学時に人や自然などの地域風土との接触が多い高校生ほど地域愛着が高いことを明らかにしている。羽鳥ら²³⁾は、地域愛着が一側面として含まれるシビックプライドを醸成する手法として、住民参加型・回覧型「思い出マップ」を提案し、対象地に対する記憶の想起や他者の記憶を知ることがまちに対する誇りや愛着意識の向上へ寄与することを示している。このように、地域愛着を高めるには、歩くこと、地域風土との接触を増やすこと、まちの記憶を想起することが有効であることが明らかにされている。

まち歩きに関する研究として、小湊ら²⁴⁾は、経路や見る対象に選択性があるまち歩きが、それらを指定されたまち歩きに比べて、経路や見た対象の記憶量が多いことを明らかにしている。また、豊田ら¹¹⁾は、ゲーム手法を導入したまち歩きが参加者のまちの認知向上へ効果をもたらすことを明らかにしている。このように、まち歩きがまちの認知向上へ影響を与えること、その方法によって差異が見られることがこれまでに明らかにされている。

以上のように、まちとの関わり方の違いによる主観的幸福感の差異、地域愛着の醸成要因、まち歩きによる効果や手法による効果の差異について明らかにされてきた。しかし、まち歩きの際のまちの見方と、地域愛着及び主観的幸福感の関係性に着目した研究はこれまでに見られない。そのため、まちの見方の差異に影響を与える「まちを見る感性」の働き方の違いが地域愛着及び主観的幸福感に与える影響の差異を明らかにする点において、本研究は新規性を有する。

2. 研究方法

2023年12月18日（月）に、一般教養の講義を受講する富山大学の学生122名を対象に、紙面によるアンケート調査を実施した（表1）。対象者の選定理由は、以下の2つである。1つ目は、総合大学の様々な学部が履修する授業であり、多様な専門性を持つ学生を対象に調査ができ

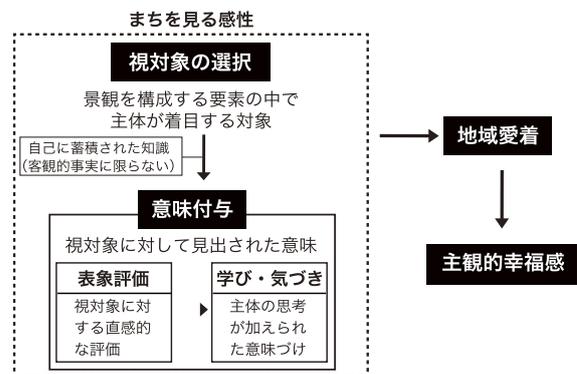


図1 本研究の仮説

るためである。2 つ目は、長期間居住していた地域の特性が「まちを見る感性」に影響を与える可能性があるという仮説のもと、76.0%の生徒が県外出身者である²⁹⁾ 富山大学の学生を対象にすることで、様々な地域に居住していた人を対象に調査ができると考えられるためである。

なお、対象者には、調査前1週間以内(12/11~12/17)の明るい時間帯に指定したルートを行ってもらった上でアンケート調査に回答してもらった。アンケート回答前のまち歩きの対象エリアは、富山県富山市総曲輪周辺とした。対象エリアは商業地がメインであるが、徒歩圏内の比較的狭い範囲の中に様々な要素が見られ、観察者それぞれに多様な捉え方が生じることが期待されるため、対象エリアに選定した。まち歩きのルートは、対象地を特徴の異なるエリアごとに分類し、分類したエリアを全て通るように設定した(図2)。具体的には、商店街など多くの人々に賑わい、商業店舗が集積する「賑わいエリア」、神社や住宅が立地する「暮らしエリア」、LRTが走り、都市的な雰囲気を持つ「都市エリア」に分けた。また、対象エリアでも特に象徴的でありランドマークとして機能していると考えられる「TOYAMAキラリ」「富山市民プラザ」「城址公園」の3つのスポットが見えるルートを設定した。まち歩きの距離は、約1.5km、30-60分程度で歩くことが可能な長さを設定した。まち歩きをしてもらう際に、ルートを示したマップを事前に配布した。マップは対象者のまち歩き中の視点を絞らないように、具体的な施設名等の掲載は可能な限り減らし、ルートの認識が可能な最低限の情報にとどめた。

アンケートは124枚回収し、有効回答は114枚(有効回答率91.9%)であった。調査項目は、①属性、②事前のまちあるきに関する項目、③地域愛着、④主観的幸福度の4項目である(表2)。

①属性では、性別、出身地、居住地、事前のまちあるき対象エリアへの来訪頻度、最も長い期間居住していた地域の特性、これまでの転居回数、まちを歩く頻度・時間・理由、まちを歩くことが好きかについて、回答を求めた。②事前のまち歩きに関する項目では、対象者のまち歩きの際の景観解釈の傾向を計測するため、「まちを見る感性」を構成する視対象と意味付与を把握するための項目を設定した。奥²⁶⁾の研究では、景観を構成する要素を「最高度の分化をする型」「主として最高度の分化をする型」「多様な分化をする型」「最低度の分化をする型」の4つの型に分けている³⁰⁾。「主として最高度の分化をする型」は、人や車のような固定的なまちの要素ではないものが挙げられる。そのため、この型を除いた3つの型に当てはまる要素が、「都市エリア」「暮らしエリア」「賑わいエリア」の3エリアそれぞれに対して1つ以上含まれるように、各エリア4項目、全12項目を設定し、「細部まで着目した」「着目した」「着目していない」の3段階で回答を求めた³¹⁾。また、意味付与の項目のうち、意味付与(表象評価)の項目は、5段階尺度によるSD法を用い「楽しいー楽しくない」「歩きたいー歩きたくない」の2項目を設定した。更に、意味付与(学

び・気づき)の項目は、松村ら¹⁷⁾の研究で意味付与(学び・気づき)として抽出されていた他者の移入、想像、再考、疑問、発見、自己了解、願望の7種類を参考に7項目を設定し、それぞれ「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の5段階で回答を求めた³²⁾。③地域愛着は、鈴木ら²⁷⁾により開発された「選好」「感情」「持続願望」の3つの指標計13項目の尺度を用いた。本研究では「選好」から2項

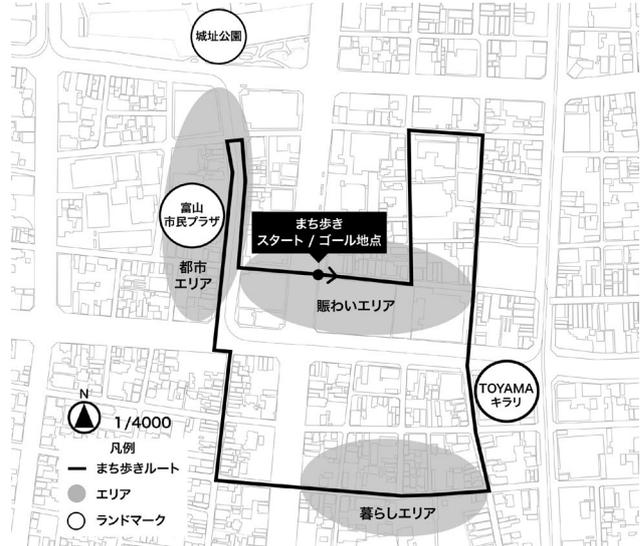


図2 まち歩き対象エリアとルート

表1 アンケート調査概要

| | |
|---------|---|
| 調査日時 | 2023年12月18日(月) |
| 調査対象 | 一般教養の講義を受講する富山大学の学生 |
| 実施方法 | アンケート調査 ※事前に指定したまちあるきのルートを行ってもらった上で、アンケート調査への回答を要請 |
| まち歩き対象地 | 富山県富山市総曲輪周辺 |
| 回収数 | 122 |
| 有効回答数 | 114(有効回答率 93.4%) |

表2 アンケート調査項目

| |
|---|
| ①属性 |
| 性別 / 出身地 / 居住地 / まち歩き対象地への来訪頻度 / 最も長い期間居住していた地域の特性 / 転居回数 / まちを歩く頻度・時間・理由 / まちを歩くことが好きか |
| ②事前に実施したまち歩きに関する設問 |
| 1) 視対象 商店街のアーケード、商店街のお店、お店の看板、商店街の街路灯、マンホール、ランドマーク、通りの街路樹、通りのベンチ、通りの舗装、神社の鳥居、住宅の窓、植木鉢の12項目 (細部まで着目した、着目した、着目していないの3段階で回答を求め、細部まで着目したを3、着目したを2、着目していないを1として数値化) |
| 2) 意味付与(表象評価) 「歩きたくないー歩きたい」「楽しくないー楽しい」の2項目 (5段階尺度のSD法で回答を求め、1~5の値として数値化) |
| 3) 意味付与(気づき・学び) 既往研究を参照し、他者の移入、想像、再考、疑問、発見、自己了解、願望の7項目 (とてもそう思う~全くそう思わないの5段階で回答を求め、とてもそう思うを5、そう思うを4、どちらでもないを3、そう思わないを2、思わないを1として数値化) |
| ③地域愛着 |
| 既往研究で用いられている尺度のうち、選好2項目、感情1項目、持続願望1項目の4項目 (とてもそう思う~全くそう思わないの5段階で回答を求め、とてもそう思うを5、そう思うを4、どちらでもないを3、そう思わないを2、思わないを1として数値化) |
| ④認知的幸福感 |
| 人生満足度を計測するSWLS尺度の5項目 (とてもそう思う~全くそう思わないの5段階で回答を求め、とてもそう思うを5、そう思うを4、どちらでもないを3、そう思わないを2、思わないを1として数値化) |
| ⑤感情的幸福感 |
| 既往研究で用いられている、過去3ヶ月間で快感情5項目(うれしい気持ち、面白い気持ち、楽しい気持ち、思いやりのある気持ち)と、不快感情5項目(腹立たしい気持ち、欲求不満な気持ち、心配な気持ち、憂うつな気持ち)をどれくらいの頻度で感じたか (とても感じた~全く感じなかったの5段階で回答を求め、とても感じたを5、感じたを4、どちらでもないを3、感じなかったを2、全く感じなかったを1として数値化) |

目、「感情」から1項目、「持続願望」から1項目と、3つの指標それぞれが含まれるように計4項目を設定し、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の5段階で回答を求めた。主観的幸福感、研究者によって様々な尺度が用いられているが、構造としては感情的幸福感和認知的幸福感の2つの側面があるとされている²⁸⁾。感情的幸福感、瞬間的な幸福をどれだけ感じているかを示している。また、認知的幸福感、人生全体に対する満足度のことであり、長期的に自分の人生を振り返ったときに自身がどれくらい幸福であると思うかを示している。両者の関係として、記憶のバイアスには関係するものの、感情的幸福感和認知的幸福感には相関関係があることがこれまでに指摘されている²⁹⁾。感情的幸福感を測る項目は、鈴木³⁰⁾で用いられている感情経験尺度を使用し、快感情と不快感情を過去3ヶ月間でそれぞれどの程度感じていたかを測るための項目を設定した。また、感情的幸福感、快感情の高さと不快感情の低さで捉える場合が多い¹⁸⁾ため、本研究では、快感情と不快感情の両側面から計測した。認知的幸福感を測る項目は、Diner³¹⁾が開発した the Satisfaction With Life Scale (SWLS) を日本語に翻訳した角野ら³²⁾の人生に対する満足尺度を用いた。これは5項目から構成される尺度であり、これまでに様々な活用事例がある^{7) 18) 19)}。各設問について、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の5段階で回答を求めた。

3. 「まちを見る感性」による対象者の類型化とその特徴

3-1. 視対象因子の抽出

「まちを見る感性」のうち視対象の構成要素を確認するため、視対象として尋ねた12項目への回答結果を用いて因子分析(最尤法・プロマックス回転)を実施した。平行分析の結果から2因子を抽出した。なお、因子負荷量が0.35以下であった「通りの舗装」は削除した。表3に因子分析の推定結果を示す。11項目の相関行列の妥当性を確認するためにKMOの標本妥当性の測度の検討を行った結果0.75となったため、因子分析の適用は妥当であると判断した。

第1因子は、「通りの街路樹」「商店街の街路灯」「通りのベンチ」「住宅の窓」「植木鉢」「マンホール」の6項目が高い因子負荷量を示した。これらは、景観の構成要素としては部分的な要素であることから、「副対象」因子と解釈した。第2因子は、「ランドマーク」「商店街のお店」「お店の看板」「鳥居」「商店街のアーケード」の5項目が高い因子負荷量を示した。これらは景観の性格を規定するものや、景観の構成要素としては規模が大きいものであることから、「主対象」因子と解釈した。また、各因子の項目の一貫性、尺度の信頼性を示す信頼性指標 α 係数は、第1因子 $\alpha=0.70$ 、第2因子 $\alpha=0.68$ であったため、十分な信頼性があると判断した。

3-2. 意味付与(学び・気づき)因子の抽出

「まちを見る感性」のうち意味付与(学び・気づき)の構成要素を確認するため、意味付与(学び・気づき)とし

て尋ねた8項目の回答結果を用いて因子分析(最尤法・プロマックス回転)を実施した。平行分析の結果から2因子を抽出した。なお、因子負荷量が0.35以下であった「他者の移入」は削除した。表4に因子分析の推定結果を示す。なお、7項目の相関行列の妥当性を確認するためにKMOの標本妥当性の測度の検討を行った結果、0.73となったため、因子分析の適用は妥当であると判断した。

第1因子は、「発見」「疑問」「自己了解」「願望」の4項目で構成されており、特に、「発見」「疑問」が高い因子負荷量を示した。どちらもまちをより注意深く見ることによって見出されやすい点が共通していることから「観察」因子と解釈した。第2因子は、「想像」「再考」の2項目で構成されている。これらは、2項目とも高い因子負荷量を示していた。これらは、まちの中で見たものから見えないことを推し量る点が共通していることから「想像」因子と解釈した。また、各因子の項目の一貫性、尺度の信頼性を示す信頼性指標 α 係数は、第1因子 $\alpha=0.68$ 、第2因子 $\alpha=0.69$ であったため、十分な信頼性があると判断した。

3-3. 「まちを見る感性」による対象者の類型化

「まちを見る感性」によって対象者を類型化するために、視対象、意味付与(表象評価)、意味付与(学び・気づき)それぞれの項目の平均値を標準化したデータを用いて、クラスター分析(ward法、平方ユークリッド距離)を行い、回答者を2つに類型化した。それぞれの類型の「まちを見る感性」の特性を明らかにするために、類型ごとに回答者の各項目の平均値を算出し、折れ線グラフで示した(図3)。類型1は64人から構成され、類型2と比較しすべての項目において平均値が高く、「まちを見る感性」が高い類型

表3 視対象因子分析結果

| 項目 | 因子 | |
|-----------|--------|--------|
| | 副対象 | 主対象 |
| 通りの街路樹 | 0.78 | -0.269 |
| 商店街の街路灯 | 0.549 | 0.019 |
| 通りのベンチ | 0.496 | 0.026 |
| 住宅の窓 | 0.454 | 0.204 |
| 植木鉢 | 0.372 | 0.266 |
| マンホール | 0.369 | 0.015 |
| ランドマーク | -0.168 | 0.625 |
| 商店街のお店 | 0.064 | 0.597 |
| お店の看板 | 0.215 | 0.521 |
| 神社の鳥居 | -0.066 | 0.509 |
| 商店街のアーケード | 0.072 | 0.424 |

表4 意味付与(学び・気づき)因子分析結果

| 項目 | 因子 | |
|---|--------|--------|
| | 観察 | 想像 |
| 発見(まちの中で見たものから、これまで知らなかった新たな発見があった) | 0.833 | -0.193 |
| 疑問(まちの中で見たものが、なぜそのようになっているかに疑問を持った) | 0.714 | -0.053 |
| 自己了解(こういう場所やこういうものが好き・興味があるなど、まちの中で見たものから、自分自身の考え方や価値観に改めて気づいたり、発見した) | 0.406 | 0.223 |
| 願望(まちの中で見たものに対して、こうだったら(こうだったら)いいのになと思うことがあった) | 0.396 | 0.17 |
| 想像(まちの中で見たものから、昔の様子など目の前では起こっていない様子や、未来の姿など現実には起きていない様子を想像した) | -0.133 | 0.867 |
| 再考(過去の記憶やこれまでに思ったことを、まちの中で見たものから思い出し、それらについて改めて気づいたり、考えたりした) | 0.016 | 0.67 |

である。この類型を感性高型とする。類型2は、50人から構成され、類型1と比較しすべての項目において平均値が低く、「まちを見る感性」が低い類型である。この類型を感性低型とする。

3-4. 「まちを見る感性」類型別地域愛着及び主観的幸福感

「まちを見る感性」の各類型の地域愛着及び主観的幸福感を把握するために、「まちを見る感性」の類型ごとに、回答者の地域愛着、感情的幸福、認知的幸福の尺度値の平均を算出し、標準化したデータを折れ線グラフで示した(図4)。

地域愛着の平均値は、感性高型が1.64、感性低型が0.22と、全体高型が全体低型と比較して高い数値を示した。感情的幸福は、快感情の合計値から不快感情の合計値を引いて算出した値とし、感性高型が0.82、全体低型が-1.26と、感性高型が感性低型に比べて高い数値を示した。認知的幸福の平均値は、感性高型が-0.63、感性低型が-0.79と感性高型が感性低型に比べて若干高い数値を示したが、他の項目と比較すると差は小さかった。特に感性高型と感性低型の平均値に差が見られた地域愛着、感情的幸福について、平均値の差が統計的に有意であるか確かめるために、有意水準5%で両側検定のt検定を行った。地域愛着は、 $t=-26.101$ 、 $p<0.01$ であり、感性高型と感性低型の地域愛着の平均値の差は統計的に有意であることが分かった。また、感情的幸福は、 $t=-4.5233$ 、 $p<0.01$ であり、感性高型と感性低型の感情的幸福の平均値の差は統計的に有意であることが分かった。以上の結果から、地域愛着、感情的幸福において「まちを見る感性」が高い人のほうが、地域愛着、感情的幸福が高いことが明らかとなった。

3-5. 「まちを見る感性」と対象者の属性の関係

「まちを見る感性」と対象者の属性の関係を明らかにするため、「まちを見る感性」の類型と属性とのクロス集計を行い、カイ二乗検定及び残差分析を行った(表5)。分析の結果、有意差が見られた項目はなく、「まちを見る感性」と長期間居住していた地域特性との関係も見られなかった。

4. 「まちを見る感性」と地域愛着及び主観的幸福感の関係

以上の分析結果を踏まえ、共分散構造分析を用いて、対象者の「まちを見る感性」と地域愛着及び主観的幸福感の関係を表す仮説構造モデルを推定した。

既往研究¹⁷⁾より、景観解釈では視対象に対して意味付与が生じること、意味付与は意味付与(表象評価)が醸成された後、意味付与(学び・気づき)が醸成される流れが確認されている。そのため、視対象と意味付与(学び・気づき)の因子分析の結果を用い、視対象の構成要素である主対象、副対象から意味付与(表象評価)に、意味付与(表象評価)から意味付与(学び・気づき)を構成している学び・気づき(観察)、学び・気づき(想像)に向けたパスを仮定した。また、「まちを見る感性」が全体的に高い人のほうが地域愛着、感情的幸福が高い結果が得られたことから、「まちを見る感性」と地域愛着、感情的幸福に関係があることが推察される。そのため、視対象、意味付与(表

象評価)、意味付与(学び・気づき)を統合した「まちを見る感性」全体から、地域愛着、感情的幸福に向けたパスを仮定した。更に、既往研究⁶⁾⁷⁾から地域愛着が主観的幸福感に影響を与えることが指摘されている。そのため、地域愛着から主観的幸福感を構成する感情的幸福、認知的幸福に向けたパスを仮定した。また、既往研究²⁹⁾から、感情的幸福が認知的幸福に影響を与えることが指摘されているため、感情的幸福から認知的幸福に向けたパスを仮定した。以上の仮説構造モデルを図5に示す。

これに基づき、パス係数が5%水準で有意となるように

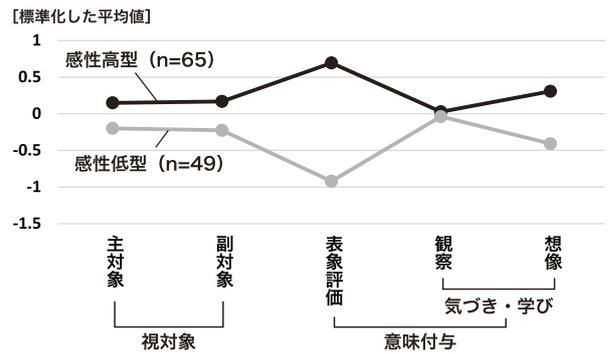


図3 「まちを見る感性」の類型

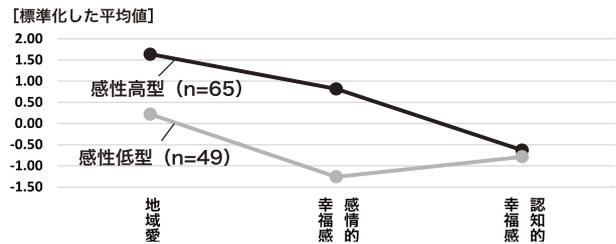


図4 「まちを見る感性」類型別平均値(標準化)

表5 「まちを見る感性」と属性の関係

| 項目 | 感性高型 | | 感性低型 | | |
|-------------------|---------------|------|-------|------|-------|
| | n | % | n | % | |
| 性別 | 男性 | 38 | 58.5% | 27 | 55.1% |
| | 女性 | 25 | 38.5% | 22 | 44.9% |
| | どちらでもない | 2 | 3.1% | 0 | 0.0% |
| 出身地 | 富山市 | 7 | 10.8% | 3 | 6.1% |
| | 富山県(富山市以外) | 7 | 10.8% | 5 | 10.2% |
| | 富山県外 | 51 | 78.5% | 41 | 83.7% |
| 現在の居住地 | 総曲輪周辺 | 3 | 4.6% | 1 | 2.0% |
| | 富山市(総曲輪周辺を除く) | 51 | 78.5% | 39 | 79.6% |
| | 富山県(富山市以外) | 7 | 10.8% | 5 | 10.2% |
| まち歩き対象地来訪頻度 | 富山県外 | 4 | 6.2% | 4 | 8.2% |
| | ほぼ毎日 | 2 | 3.1% | 0 | 0% |
| | 週3.4回 | 3 | 4.6% | 1 | 2.0% |
| | 週1.2回 | 10 | 15.4% | 4 | 8.2% |
| | 月に数回 | 18 | 27.7% | 18 | 36.7% |
| | 年に数回 | 13 | 20.0% | 9 | 18.4% |
| | ほとんど訪れたことはない | 13 | 20.0% | 12 | 24.5% |
| | 初めて訪れた | 6 | 9.23% | 5 | 10.2% |
| 最も長い期間居住していた地域の特性 | 住宅地(周辺に自然がない) | 32 | 49.2% | 21 | 42.9% |
| | 住宅地(周辺に自然がある) | 19 | 29.2% | 18 | 36.7% |
| | 団地 | 2 | 3.1% | 2 | 4.1% |
| | 中心市街地 | 8 | 12.3% | 2 | 4.1% |
| | 歴史的な街並みが残る地域 | 0 | 0.0% | 1 | 2.0% |
| | 農村地域 | 4 | 6.2% | 5 | 10.2% |
| 漁村地域 | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | |
| その他 | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | |

探索的に推定を行い、モデルの最も適合度が高い結果を採用した。なお、図中の数値は標準化係数を表し、誤差項は省略した。主対象から意味付与（表象評価）に向けた因果パスが確認された。これは、景観の性格を規定したり規模が大きい対象へ着目することが、意味付与を促進することを示している。また、意味付与（表象評価）から、意味付与（学び・気付き）に向けた因果パスが確認された。これは、意味付与（表象評価）が意味付与（学び・気付き）を促進することを示しており、既往研究¹⁷⁾の知見を支持する結果となった。また、意味付与（学び・気付き）を構成する要素である、学び・気づき（想像）から、地域愛着に向けた因果パスが確認された。これは、想像や再考を介した意味付与が地域愛着の醸成へと繋がることを示している。更に、地域愛着から認知的幸福感に向けた因果パスが確認された。これは、地域愛着と主観的幸福感に関係性が見られるという既往研究^{6) 7)}の知見を支持する結果となった。加えて、感情的幸福感から認知的幸福感に向けた因果パスが確認された。これは、感情的幸福感と認知的幸福感に関係性が見られるという既往研究²⁹⁾の知見を支持する結果となった。

以上より、「まちを見る感性」が高い人が地域愛着も高く、そのことが認知的幸福感を高めることが明らかとなった。また、「まちを見る感性」の中でも、視対象は主対象に着目することが意味付与（表象評価）に正の影響を与えること、意味付与（学び・気づき）を構成する学び・気付き（想像）が地域愛着に正の影響を与えることが明らかとなった。すなわち、景観を構成する要素では規模の大きい主対象へ着目することにより意味付与に繋がりやすいこと、また、意味付与の中でも、自身の思考を伴った意味付与（学び・気づき）を構成する学び・気づき（想像）が地域愛着を高めることが明らかとなり、それにより認知的幸福感が高まることが分かった。

5. 総合考察

これまでの分析結果を総合的に考察する。共分散構造分析の結果から、「まちを見る感性」は地域愛着を介して主観的幸福感に影響を与えることが分かり、「まちを見る感性」と主観的幸福感に関係があることが明らかとなった。また、「まちを見る感性」がどのように地域愛着を高めるかに着目すると、主対象に着目することで意味付与（表象評価）、さらに学び・気づき（想像）が促進され、それが地域愛着に影響を与えることが明らかとなった。

既往研究において、景観構成要素の中でも規模の大きい要素が認識されやすいことが明らかとなっている²⁶⁾。主対象に含まれる景観要素は副対象よりも規模の大きいものが多く含まれていたため、主対象が認識されやすく、意味付与（表象評価）の醸成に影響を与えたと考えられる。そのため、副対象に着目する仕掛けを用いることで、副対象も意味付与（表象評価）の促進に繋がる可能性がある。

意味付与は、学び・気づき（想像）が地域愛着へ影響を与えることが明らかになったため、地域愛着を醸成するた

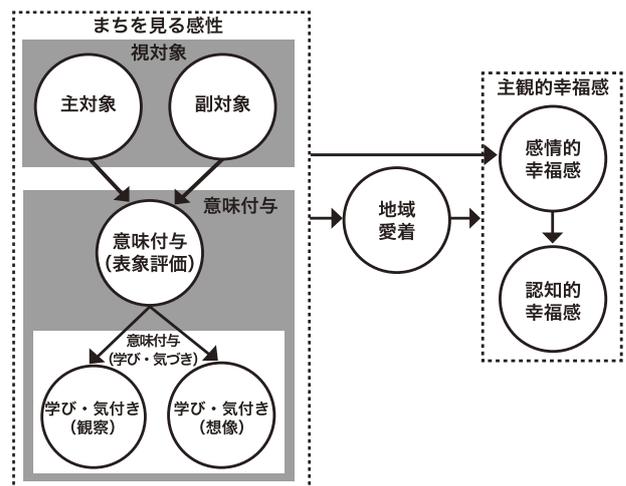


図5 仮説構造モデル

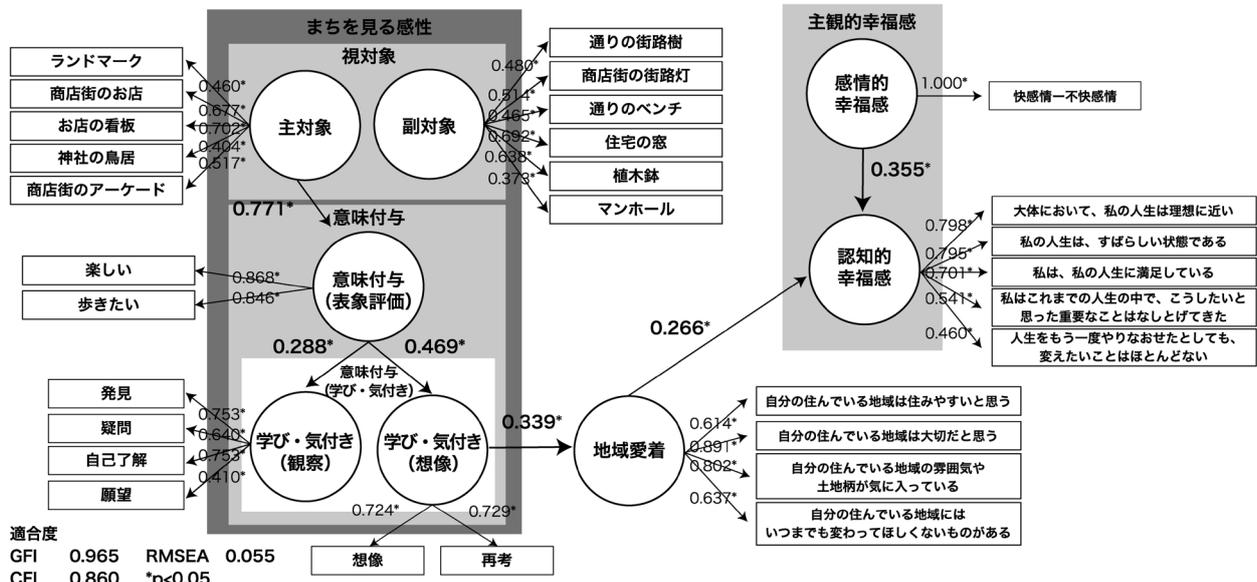


図6 共分散構造分析結果

めには、学び・気付き（想像）を促すことが有効である。松村ら¹⁷⁾は、景観体験を通して得られる「経験知」が、聞いたことや調べたことなど、景観体験を介していない「情報知」に比べ、意味付与（学び・気付き）を醸成することを明らかにしている。学び・気付き（想像）は意味付与（学び・気付き）の構成要素であるため、まち歩きでは自身の体験を介した知識の獲得を促進することが、学び・気付き（想像）の醸成に有効である。また、自身の中に蓄積されている景観体験の中で得られた「知」を引き出して、意味付けをすることが重要であるため¹⁷⁾、想像する内容は、正当性よりも自らの経験から得られた「知」と結びつけて想像することが地域愛着へと繋がる。そのため、視対象に関係する過去の経験を思い出しってもらう機会を設けるなど、視対象と自身の経験知を結びつけるための仕掛けが地域愛着の醸成に有効であると考えられる。

本研究では、対象者の属性と「まちを見る感性」に関するは見られなかった。既往研究において、視対象として捉えるものの傾向は、居住者と非居住者でほとんど違いが見られない¹⁷⁾ことや、人がまち歩きの中で見出す意味は、来街経験やまちの特性による傾向はなく、個別的事であることが明らかにされている³⁶⁾。これらを踏まえると、「まちを見る感性」は、属性による影響を受けづらいと考えられる。

6. おわりに

本研究では、まち歩きでのまちの見方の違いが、地域愛着及び主観的幸福感へ与える影響の差異をもたらすと考え、まちの見方の違いをもたらす働きを「まちを見る感性」と定義し、どのような「まちを見る感性」の働き方が、地域愛着及び主観的幸福感の向上に繋がるかを実証的に検証した。結果、「まちを見る感性」は、地域愛着を介して主観的幸福感に影響を与えることが分かり、「まちを見る感性」と主観的幸福感に関係があることが明らかとなった。また、「まちを見る感性」のどのような働きが地域愛着を高めるかに着目すると、主対象に着目することで意味付与（表象評価）、さらに学び・気付き（想像）が促進され、それが地域愛着に影響を与えることが明らかとなった。この結果は、まち歩きが地域愛着及び主観的幸福感の向上に効果を持ち得ることを示すとともに、まちの見方の違いによって、地域愛着及び主観的幸福感に与える影響に差異が見られることを示唆している。そのため、想像を伴う意味付与を促進する仕掛けを取り入れたまち歩きのプログラムを実施することで、地域愛着及び主観的幸福感を高められると考えられる。また、まちを歩く主体に選択性を与えることも、それらを高めるために有効であると考えられる。経路に選択性があるまち歩きのほうが、対象地に対する地域愛着が醸成されること¹³⁾や、視対象の記憶量や、視対象に対する感想の記憶が長期間残ること²⁴⁾が明らかにされている。まち歩きに選択性があることで、能動的にまちを見ると考えられ、その結果「経験知」の獲得へと繋がること考えられる。「経験知」の獲得は意味付与（学び・気付き）

の醸成に有効¹⁷⁾であるため、まち歩きの中で選択性があることも、地域愛着及び主観的幸福感を高めるために有効であると考えられる。

本研究では、大学生を対象に調査を実施することで、特定の年齢層の傾向を明らかにできた。一方、年齢を重ねるほど景観体験の経験は増加することが考えられる。意味付与（学び・気付き）は自身の景観体験から得られた「経験知」によって主に醸成される¹⁷⁾ため、年齢層の高い人のほうが意味付与（学び・気付き）が醸成されやすい可能性がある。そのため、他の年齢層においても同様の傾向が見られるか、また年齢層による差異があるか、今後更なる検証が必要である。

【補注】

- (1) 奥²⁶⁾の研究では、街路景観の構成要素が、瞬間露出実験を通じて段階的に見分けられるようになる過程を「視覚的に分化する」としている。街路景観の瞬間視実験での要素の出現率と露出時間の2軸で景観の構成要素を分類しており、「最高度の分化をする型」はアーケードなどの主景要素、「多様な分化をする型」は看板などの添景要素や窓の形態などの主景を構成する部分要素、「最低度の分化をする型」はオープンスペースのテラスチャーなどが当てはまる。
- (2) 藤南ら³³⁾は、「非常にそう思う」「ある程度そう思う」「あまりそう思わない」の3件法の回答を間隔尺度として扱い、妥当性が検証された共通する尺度と相関があることから、その妥当性を示している。この研究で用いられた項目は、正の項目2つと負の項目1つから成り、視対象と同様の構成である。さらに、織田³⁴⁾は、狭い範囲に刺激郡が分布する場合は、評定尺度にあてはめられた反応語はカテゴリー間の序列を決定する役割としての機能が強く働くため、反応語が異なっても評価結果は概ね同じになることを明らかにしている。加えて、カテゴリー用語の選択に際しては、カテゴリー間の心理的距離を等間隔にしようとする必要はないと指摘している。したがって、本研究では視対象の項目を間隔尺度として扱った。これらを間隔尺度として扱うことは、視対象の着目度合いの傾向を捉える上で、一定の妥当性を有すると考えた。
- (3) 各尺度の扱いについて、Carfio & Perla³⁵⁾は、リッカート尺度を間隔尺度として扱うことの妥当性についての議論を整理し、これを支持する立場を示している。そのため、本研究ではリッカート尺度を間隔尺度として扱った。

【参考文献】

- 1) Easterlin, R. A. (1974) "Does Economic Growth Improve the Human Lot? Some Empirical Evidence", in P. A. David and M. W. Reder, eds., Nations and Households in Economic Growth: Essays in Honor of Moses Abramowitz, New York: Academic Press, pp. 89-125
- 2) Jakoosson Bergsted, C., Gamble, A., Gärling, T., Hagman, O., Polk, M. and Ollsen, L. E. (2009) "Subjective well-being related to satisfaction with daily travel, Unpublished manuscript"
- 3) Kahneman, D. and Krueger, A. B. (2006) "Developments in the measurement of subjective well-being, Journal of Economic

- Perspectives” ,Vol.20, pp.3-24
- 4) Clark, A. E. and Oswald, A. J. (1996) “Satisfaction and comparison income, Journal of Public Economics” ,Vol.61, pp.359- 81
 - 5) Diener, E., Suh, E. M., Lucas, R. E. and Smith, H. L. (1999) “Subjective well-being: Three decades of progress, Psychological Bulletin” , Vol.125, pp.276-302
 - 6) 田中里奈, 橋本禪, 星野敏, 清水夏樹, 九鬼康彰 (2013) 「居住地域の特性が住民の主観的幸福度に与える影響」, 農村計画学会誌, Vol.32, No.Special Issue, p. 167-172
 - 7) 橋本成仁, 恒藤佑輔 (2018) 「住民主体による生活交通運営活動への参加意識と住民の主観的幸福感との関係に関する研究」, 都市計画論文集, 53 巻 2 号, pp. 124-131
 - 8) 須賀由紀子, 土屋薫 (2019) 「大学生による地域の価値共有プログラムの実践」, 地域活性学会第 11 回研究大会論文集, pp.111-114
 - 9) 小林夏月, 高見沢実, 野原卓, 矢吹剣, 尹莊植 (2023) 「まちあるきを通じた地域資源の認知および地域評価の変化が地域愛着に与える影響に関する研究 — 藤沢市片瀬地区の住民を対象として—」, 横浜国立大学地域実践教育研究センター地域課題実習・地域研究報 2022 年
 - 10) 海野碧 (2013) 「まちあるきが地域愛着に与える影響 — 長崎さるくを対象として—」, 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻修士論文
 - 11) 豊田章起, 服部敦, 岡本肇 (2017) 「ゲーミフィケーションによるまち歩きイベントの効果に関する研究~ 豊川市諏訪地区におけるすごろくイベントを例として~」, 日本建築学会計画系論文集, 82 巻 734 号, pp.999-1008
 - 12) 佐野浩祥 (2021) 「マイクロツーリズムの実態と地域愛着との関係—シリアスな観光に着目した Web アンケート調査をもとに—」, 観光研究, 33 巻 3 号, pp.11-18
 - 13) 太田壯哉, 長谷川直樹, 小池博 (2019) 「不便さが商店街の愛着, 満足, 再利用意向に与える影響」都市計画論文集, 54 巻 3 号, pp.1275-1282
 - 14) 篠原修編 (1998), 「景観用語辞典」, 彰国社
 - 15) 阿部一 (1990) 「景観・場所・物語—現象学的景観研究に向けての試論—」, 地学評論, 67 巻 7 号, pp. 453-17 465
 - 16) 村松美邑, 後藤春彦, 山村崇, 林廷玟 (2021) 「外国人観光客が捉える「名もなき景観」の価値と景観の意味解釈の構造—韓国リピーター観光客の語りの分析を通して—」, 日本建築学会計画系論文集, 86 巻 786 号, pp. 2125-2135
 - 17) 村松美邑, 後藤春彦, 山村崇, 林廷玟 (2023) 「景観解釈における「知」を介した意味構成過程とその構造—個人的な経験としての「景観」の分析を通じた「構成される意味」論の試み—」日本建築学会計画系論文集, 88 巻 813 号, pp.3018-3029
 - 18) 北川夏樹, 鈴木春菜, 中井周作, 藤井聡 (2011) 「日常的な移動が主観的幸福感に及ぼす影響に関する研究」, 土木学会論文集 D3(土木計画学), 67 巻 5 号, pp.67_I_697-67_I_703
 - 19) 橋本成仁, 今村陽子, 海野遥香, 堀裕典 (2022) 「サードプレイスと主観的幸福感に関する研究」, 土木学会論文集 D3(土木計画学), 77 巻 5 号, pp.I_375-I_383
 - 20) 長奈緒子, 近藤早映, 後藤智香子, 泉山墨威, 新雄太, 小泉秀樹 (2022) 「自治会参加と高齢者の主観的幸福感との関連 国立市富士見台地域の三自治会を事例として」, 都市計画報告集, 20 巻 1 号, pp. 66-72
 - 21) 大谷華, 芳賀繁 (2003) 「地域交通環境の利用が高齢住民の地域感情に及ぼす影響」, 立教大学心理学研究, Vol.45, pp.1-9
 - 22) 藪谷祐介, 阿久井康平 (2021) 「高校生の通学時における地域接触が地域愛着形成に与える影響 富山県小矢部市内の高校に通学する高校生を対象として」, 都市計画論文集, 56 巻 3 号, pp.772-779
 - 23) 羽鳥剛史, 片岡由香, 牧野太亮 (2015) 「住民参加型・回覧型「思い出マップ」によるシビックプライド醸成策に関する研究 四国中央市妻鳥町「棹の森」を対象とした取り組み事例」, 都市計画論文集, 50 巻 3 号, pp.445-450
 - 24) 小湊愛理, 齋藤朝 (2017) 「街歩き中の選択性の有無による歩行の記憶の差異に関する研究」, 景観・デザイン研究講演集 No.13 , pp.473-480
 - 25) 富山大学 HP, 地域別入学状況 (学部学生), <https://www.u-toyama.ac.jp/outline/overview/statistics/regional/>, (2024 年 4 月 25 日最終閲覧)
 - 26) 奥俊信 (1982) 「瞬間視実験に基づく街路景観構成要素の分析: 街路景観の視覚特性ならびに心理的效果に関する実験的研究 第 1 報」, 日本建築学会論文報告集, 321 号, pp.117-124
 - 27) 鈴木春菜, 藤井聡 (2008) 「地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究」土木計画学研究論文集, 25 号, pp.357-362
 - 28) Diener, E., Suh, E. M., Lucas, R. E., & Smith, H. L. (1999) “Subjective well-being: Three decades of progress. Psychological Bulletin” , Vol.125, pp. 276-302.
 - 29) 寺崎正治, 網島啓司, 西村智代 (1999) 「主観的幸福感の構造」川崎医療福祉学会誌, Vol.9, No.1, p. 43-48
 - 30) 鈴木有美 (2002) 「自尊感情と主観的ウェルビーイングからみた大学生の精神的健康: 共感性およびストレス対処との関連」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学 , pp.145-155
 - 31) Diener, E., Horwitz, J. and Emmons, R. A. (1985) “Happiness of the very wealthy, Social Indicators Research” , Vol. 16, pp. 263-274
 - 32) 角野善司 (1994) 「人生に対する満足尺度(the Satisfaction With Life Scale51 [SWLS])日本版作成の試み」, 日本教育心理学会 総会発表論文集, Vol. 36(0) , p. 192
 - 33) 藤南佳代, 園田明人, 大野裕 (1995) 「主観的健康感尺度 (SUBI) 日本語版の作成と信頼性, 妥当性の検討」, 健康心理学研究, Vol.8 (2) , pp.12-19
 - 34) 織田揮準 (1978) 「評定尺度による判断過程の研究」, 教育心理学研究, Vol.26, No.3, pp. 142-151
 - 35) James Carifio, Rocco Perla Perla (2008) “Resolving the 50 year debate around using and mis using Likert scales scales, Medical Education” , Vol.42, No.12, pp.1150 -1152
 - 36) 高浜康亘, 福井恒明 (2011) 「行動と意味から見た街歩き体験の分析」, 景観・デザイン研究講演集, No.7, pp.98-108